

NO.328

1996 1

文化庁月報

CONTENTS

特集／海外における建造物修復保存協力

——ベトナムでの技術協力を例として

巻頭言 文化遺産保存の国際協力の在り方	斎藤 英俊	4
文化財保存への技術協力	人見 楠郎	8
ベトナム・ホイアンにおける文化財 保存の経過と海外技術協力の意義	福川 裕一	10
ベトナムにおける海外技術協力の実例	増田千次郎	12
ベトナムで文化財的保存修理を行って	豊城 浩行	16

阪神・淡路大震災と文化財の復旧	34
-----------------	----

連 載

●随 想／「国立まんが美術館」の夢	矢口高雄	20
●地域からの文化発信／博物館・美術館紹介⑩	長野県立歴史館	22
●後世に残そう我が県の文化財⑩／埼玉県 太刀、短刀、鷲宮催馬楽神楽		25
●著作物の再販制度を考える①	著作物の再販制度とは	28
●芸術文化活動でまちづくり③	栃木県栃木市〔蔵の街〕音楽祭	30
●著作権法講座Q&A／10		33

ACA(Agency for Cultural Affairs)NEWS

・平成7年度 文化勲章受章者 文化功労者決定	36
・阪神・淡路大震災被災芸術団体支援について	38
・平成7年度(第50回記念)芸術祭賞決定	39
・重要有形民俗文化財の新・追加指定	40
・第42回 文化財防火デー	42
・平成7年度 文化庁長官表彰決定	43

イベント案内

・西武アート・フォーラム「第13回 日本伝統漆芸展」／45	・2月の国立劇場／47
・国立西洋美術館「大英博物館所蔵イタリア素描展」／46	・表紙解説／編集後記／48

随想



やぐち・たかお(本名 高橋高雄)／1939年秋田県生まれ。秋田県立増田高等学校卒業後、羽後銀行に就職。70年まんが家を志し銀行を退職、同年、小学館「週刊少年サンデー」誌上に「鮎」でデビュー。73年「釣りキチ三平」連載スタート。74年「釣りキチ三平 幻の怪蛇パチヘビ」で講談社出版文化賞、76年「マタギ」で、日本漫画家協会大賞を受賞。

事実であろう。しかし、時代のニーズはいつの世も安閑とはしていない。ニーズを「価値観」と置き換えてもいいのだが、とにかく日進月歩というか、世の中の経済情勢や、人々の生活様式の変化と相まって、物の価値基準も変わるのが常である。

「漫画」がまさにそうである。発展当初は確かに「無邪気な滑稽を主とする絵」だったろう。しかし、今日の日本のマンガを見ると、質的にも量的にも大変革をとげ、世界ナンバーワンのマンガ大国となっているのは事実だ。

昨年(平成七年)夏、アメリカから著名なマンガ家が八名ほど来日した。その折、都内のホテルで会談したのだが、彼等の驚きはやはり日本のマンガ文化の隆盛であった。マンガ週刊誌の多さや言うに及ばず、書店の書棚にズラリと並んだマンガ単行本の点数のおびただしさだった。そして、そのうちの一人が羨望のまなざしでポツリと言った。

「アメリカもヨーロッパ諸国も日本も、ある時期まで

ボクの郷里は秋田県増田町という、人口一万人足らずの小さな町である。その町が昨年一〇月、実にユニークな美術館をオープンした。増田町まんが美術館である。

日本には現在、例えば長野県更埴市の「近藤日出造記念館」のような漫画家個人の記念館はいくつかあるが「増田町まんが美術館」のようなコンセプトのもとに建てられたものは、ボクの知る限りない。おそらく日本で初めての試みと言っても過言ではないだろう。ここまで記してボクは「漫画」を、漢字のほかに平仮名の「まんが」と二様の表記をした。そして、ボク自身は日常的に片仮名の「マンガ」を用いている。読者にとってはどうでもいいことかも知れないが、実はマンガ家のなかにはコレにこだわる人が少なくない。どんな意味があるのだろうか。

その源泉は広辞苑(岩波書店)にあるようにボクは思う。ちなみにボクの座右にある「広辞苑」(第二版)で「漫画」の項を引いてみると次のように記されている。

「単純・軽妙な手法で描かれ、無邪気な滑稽を主とする絵」

これが広辞苑の定義する「漫画」の概念というわけだ。かなり乱暴に要約すると、——シンプルなたツチで描かれた、とるに足らない面白おかしい絵——である。

確かに漫画の歴史や、その発展のプロセスをたどると、「滑稽」や「風刺」「ユーモア」といった、いわゆる「面白おかしい」要素を基盤として推移して来たことは

「国立まんが美術館」の夢

矢口高雄

は「マンガ」というジャンルを同じように捉え、同じように歩んで来たはずなのに、日本だけがどこからこんなに変わってしまったのだろうか……」

それに対し、日本のマンガ家の一人がズバリと言った。

「あなた方の国に手塚治虫が生まれなかったことで。日本のマンガは手塚治虫の出現により、世界に類例のないマンガを産み、創り出したのです」

手塚治虫が産み出した、世界に類例のないマンガとは、いわゆる「ストーリーマンガ」である。従来の「無邪気な滑稽を主とした絵」としての「漫画」から、ストーリー性を豊かにしたスケールの雄大な「まんが」「マンガ」への大変身を見せたのである。日本の漫画が世界の漫画の根幹から大きく枝分かれたのはここである。しかもそれは単に枝分かれにとどまらず、太い独立した大木へと成長したのが今日の日本の「マンガ」なのである。つまり「まんが」「マンガ」は、手塚治虫以降の日本のマンガ界が産み出した「日本式マンガ」と言えるだろう。

アメリカの諸氏は大納得とばかりに、しきりにうなずいていた。それもそのはずである。近年では、東南アジア諸国は言うに及ばず、ヨーロッパ諸国さえもこの「日本式マンガ」を「MANGA」と呼んで、今や世界の共通語にさえなりつつあるのだ。換言すれば「マンガ」(日本式ストーリーマンガ)は今や日本が世界に誇る一大「文化」なのである。

ボクの郷里にオープンした「増田町まんが美術館」のコンセプトはここにある。「まんが」を、昭和の日本

が産み出した最もバワフルな「文化」と位置づけ、更に「マンガ」というジャンルに共通した「楽しさ」「夢」「表現」といった創造性を通して豊かな感性の醸成の場にしよう、と意図したものである。

ちよつと館内をご案内しよう。ボクの郷里ということもあり、アプローチはまずボクのアトリエを再現した一室から始まる。ボクの年譜や主要作品の原画を展示する一方、郷土の山や川に棲む昆虫や魚たちのウォッチングエリアが展開する。しかし、何と言ってもメインはらせん状に移り行くスロープギャラリーである。このスロープギャラリーの壁面を飾るのが当代超一流のストーリーマンガ家およそ六〇名、約四〇〇点余の原画である。まさにバワフルな日本のマンガ文化の殿堂である。加えて韓国、台湾、香港、そして中国各国のストーリーマンガ家諸氏の原画展コーナーも併設されている。

さらに、楽しいオープニング企画展があった。わずしか一か月の開催だったが「手塚治虫・矢口高雄まんが二人展」だった。子どもの頃、手塚マンガにシビレ、あこがれてマンガ家になったボクにとっては、望外の企画展であり、感激もひとしおだった。

最後に、この「美術館」には企画段階から全て携わった。苦勞も多かったが、楽しい歳月だった。そんななかで、ボクの胸の中に更なる大きな夢が膨らんでいた。次は「都立」か「国立」という夢である。「国立」ならば、その所轄は文化庁のはずである。いつの日か「国立まんが美術館」を……。

表紙解説 特別史跡名護屋城跡並陣跡

名護屋城跡並陣跡は「文禄慶長の役」(1592～1598)で朝鮮半島への侵略基地となった名護屋城跡と、秀吉に従った全国諸大名の陣跡からなる広大な遺跡群です。

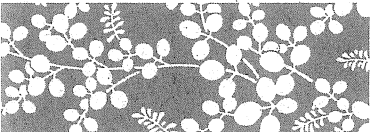
名護屋城跡本城は、天然の良港名護屋浦を足下に、玄界灘を見渡す高台に築かれており、よく晴れた日には豊岐から遠く対馬まで間近に望むことができます。総面積は約17万㎡。当時では大坂城に次ぐ規模の本格的な近世城郭でありながら、西国大名の分担によりわずか5ヶ月足らずで主要部が完成したと言われています。

また、3町にまたがる約120箇所の陣跡は、本城から半径約3km圏内にある山丘上のことごとくに分布しており、土塁や石垣で囲まれた館の一つ一つがまるで中世山城のような規模、景観を呈しています。

この西国の一寒村が突如人口10万人とも言われる城下町に変貌した当時の賑わいは名護屋城図屏風にも詳しく描かれているところですが、昭和51年から始まった本城、陣跡の発掘調査によっても、それが決して誇張でないことが次第に明らかになりつつあります。また、並行して保存整備が進められるとともに、平成5年には名護屋城跡博物館が開館したことにより、現在では年間を通じて県内外から多くの人が訪れ、「文禄慶長の役」の実像に触れることができるようになりました。秀吉の野望がもたらしたこの悲惨な侵略戦争の歴史的意味を一般の人に明らかにすることは、新しい日韓の友好関係を築く上でも、是非とも重要なことと考えています。

名護屋城跡では、博物館を中心に日韓文化交流事業のほか史跡探訪会や茶会などを開催、また、毎年夏、玄界灘に沈む夕日を背景に本丸跡で催される新能は、名護屋城跡ならではの町の一大イベントとしてすっかり定着しました。

(佐賀県教育委員会文化財課 田平徳栄)



編集後記

あけましておめでとうございます。本年も文化庁月報をよろしくお願ひします。

さて、年末から年始にかけては、全国各地で第九のコンサートが数多く開かれ、多くの人が鑑賞(又は参加)されたことと思いますが、皆さんは、クラシック音楽をどのように楽しんでおられますか? 「クラシック音楽を視覚的に楽しむ」——一聴すると非常に不思議に思うかもしれませんが、私が最近発見した音楽の楽しみ方です。

先日、一流の交響楽団の演奏を鑑賞する機会がありましたが、そのときの演奏はCDで聴くよりもはるかに圧倒的な迫力で心に伝わってきました。直接聴く音の響きのすばらしさは言うまでもありませんが、その迫力の最大の源泉は、指揮者や演奏者のダイナミックな動きにあったと思います。指揮者の大胆なタクトの振りに従って、オーケストラは大きなうねりをなし、音を発します。単にスピーカーから流れる音を聴いていただけではわからない、芸術創造の過程と、その過程に満ち溢れる音楽に対する熱意がズキズキと心に伝わってきたからだと思います。

皆さん方も、とし一年、積極的に芸術活動に参加され、新しい楽しみを発見されることを祈っております。

(か)

文化庁月報 1月号 (通巻328号)
平成8年1月25日印刷・発行

編集—文化庁
〒100 東京都千代田区霞が関3-2-2
発行—株式会社ぎょうせい
本社 〒104 東京都中央区銀座7-4-12
本 部 〒167-88 東京都杉並区荻窪4-30-16
電話 編集 03(3571)2126
販売 03(5349)6666
振替口座 00190-0-161

印刷所—(財)行政学会印刷所

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、筆者個人の見解であることをお断りいたします。

定価530円(本体515円) 送料76円
年間購読料6360円
本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先
(株)ぎょうせい営業第一課宣伝係
電話03(5349)6657 (ダイヤルイン)
©1996 Printed in Japan
ISSN 0916-9849

本誌は本文用紙に再生紙を使用しております。